

## 明治六年の政変と西南戦争

### ―近代日本の分岐点と西郷隆盛



梶原 宣俊

#### 一、はじめに

明治維新一五〇周年を迎え、NHKの大河ドラマ「西郷どん」も始まり、鹿児島は盛り上がりを見せている。観光や経済活性化につながることも大事だが、あまりにも商業主義的な「西郷どんブーム」には多少首をかき上げたくなる。むしろ、これを機会に明治維新や西郷隆盛の近代日本における歴史の意味について、現代の視点から考え、教訓を引き出すことも大事であると思う。特に、明治維新と日本の近代化の歴史を美化するだけでなく、

また教科書的理解を超えて、その光と影を冷静に分析すべきチャンスではなかるうか。

明治維新は、二六〇年も続いた江戸徳川幕府を崩壊させた大革命であった。黒船来航を契機に、徳川幕府・武士を頂点とする支配構造を変革するために、地方の下級武士たちが朝廷を巻き込んで起こしたクーデターであった、一八六七年、大政奉還が上表され、王政復古の号令が出された。その後、鳥羽伏見の戦いで戊辰戦争が始まり、多くの犠牲者を出したが、江戸城無血開城により「無血革命」のイメージが定着した。

鈴木莊一は『政府に尋問の筋これあり・西郷隆盛の誤算』（二〇一八毎日ワンス）で、「明治維新は市民革命である。イギリス名譽革命（一八六八）、アメリカ独立宣言（一七七六）、フランス革命（一七八九）に次ぎ、ロシア革命（一九一七）に先立つ、世界史上第4番目

の市民革命である」と述べている。私も以前からそう考えてきた。したがって私は、なぜ「明治維新」と名付け「明治（市民）革命」と名付けなかったかと長い疑問に思ってきた。今回初めて、「維新」という言葉が水戸学から出てきたことを知った。もし、明治市民革命という言葉を使っていたら国民の意識は相当変わったのではなからうか。革命という言葉を使わずに「維新」という言葉を使った点に、日本人らしい感性と政府、支配者の思いが潜在しているように思われる。しかも、この革命は明治初期にその後の国家ビジョンを巡って大きな分岐点を迎えた。それが、「明治六年の政変」であり「西南戦争」であったと私は考えている。

私は、学生時代から、自分が生まれる一年前まで続いた戦争に関心を持ちささやかながら、近現代史の勉強をしてきた。特に、第二

次世界大戦、日本の大東亜戦争（太平洋戦争）の歴史について学びながら、この悲惨な大戦争の原点は、明治新政府の急速な近代化（欧米化）、および天皇を中心とする絶対主義、有司専制（特定の藩閥政治）による官僚制国家にあるのではないかと考えてきた。そして、最近はその明確な分岐点が「明治六年の政変」と「西南戦争」ではなかったかと考えるに至った。さらに西南戦争は、明治維新後の第二の革命戦争ではなかったかと考えるようになった。

つまり、私は明治維新後の十年間、とりわけ明治六年の政変が、近代日本の在り方を大きく左右する重要な分岐点ではなかったかと考えている。幕末から明治維新までの歴史がドラマ等で注目されがちだが、明治新政府（大久保・岩倉・木戸たち）がいかに日本の近代化を推し進めようとしたのか、そして、その

過程で明治維新の立役者、西郷隆盛をはじめ、後藤象二郎、江藤新平、板垣退助、大隈重信たちがいかに考え行動してきたかを、西南戦争一四〇周年をも視野に入れ、明治元年から「明治六年の政変」そして「西南戦争」に至るまでの十年の歴史を検証してみたい。

## 二、明治十年間の歩み

まず明治十年間の歴史を西郷との関連で概観しておこう。

一八六七年（慶応三年）

一〇月一日 大政奉還

二月九日 王政復古の大号令・小御所会議

二月二十五日 江戸薩摩藩邸焼き討ち

一八六八年（慶応四年）（明治元年）

一月三日 鳥羽伏見の戦い・戊辰戦争

三月一日 五箇条の御誓文発布

三月十五日 西郷隆盛、勝海舟と会談

四月一日 江戸城無血開城

六月五日 西郷京都に上り北越戦線に備える

ため鹿兒島に帰る

七月一日 江戸が東京となる

八月二七日 明治天皇即位の大礼

九月八日 明治に改元・一世一元の制

九月三日 会津藩 降伏

九月二六日 庄内藩 恭順

九月二七日 西郷 庄内藩に寛大な処置

一〇月三日 天皇 東京に遷御

一〇月二三日 西郷 後事を小松・大久保に

託し鹿兒島に帰る

一〇月二八日 新政府 藩治職制を定め各藩に

執政・参政・公儀人を置く

一八六九年（明治二年）

一月一日 西郷朝廷より召されるも固辞

二月 久光 西郷に親書を送り藩政改革

の意見、藩政参画を打診するも動かず

二月二五日 藩主忠義 日当山温泉に出向き

西郷に藩政参与を要請

二月二六日 西郷 鹿兒島に帰り、藩の参政

一代寄合に就任、私領制度を廃止し常備軍を編成

五月一日 西郷 函館戦争の援軍を率いて

鹿児島を出航二五日に着くがすでに戦争

は終了

五月二一日 函館戦争

五月一八日 五稜郭開城、榎本、大鳥降伏

戦争終了

六月二日 西郷に武人としては最高の禄永世

千石賜る

九月二六日 西郷 正三位に叙せられるも辞退

一八七〇年(明治三年)

一月一八日 西郷 藩参政を辞退するも相談

役を命ぜられる

七月三日 西郷 鹿児島藩大参事となる

七月二七日 横山正太郎(薩摩藩士) 維新の

大義を忘れ私利に走る時勢を慨嘆、衆議

院に諫書を投じて自刃、西郷その心情に

深く同情

十一月七日 旧庄内藩主酒井忠篤ら九三名西

郷を訪問

一二月 勅使岩倉具視、大久保利通来鹿、

新政府出仕の勅命を伝える。西郷、

郡県制や親兵制を提案

一八七二年(明治四年)

一月三日 西郷 鹿児島を出航、山口で毛利

父子、高知で板垣と会談 薩長土連合を

説く

六月二六日 大久保の説得で木戸とともに参

議に就任、軍制改革や警察制度の確立に

尽力

七月一四日 廃藩置県の大詔を渙発 板垣・

大隈参議となる

一〇月二〇日 条約改正を目的に岩倉、木戸、

大久保ら欧米使節団派遣を決定

一月二二日 横浜を出航、留守政府西郷に

一任

一八七二年(明治五年)

五月三日 西郷 天皇の西国巡幸に同行

七月二〇日 西郷 参議兼陸軍元帥

八月二日 学制発布

十一月二八日 徴兵令発布

一八七三年(明治六年)

四月一九日 後藤象二郎、大木、江藤新平参議

となる

五月一〇日 西郷陸軍大将兼参議となる

五月二六日 大久保欧州より帰朝(七月には

木戸九月には岩倉帰朝)

六月二二日 朝鮮問題が初めて閣議にかかる

八月三日 閣議で朝鮮使節派遣問題を討議、

西郷意見書提出

八月二七日 閣議で朝鮮に西郷を使節として

派遣することが決まる

八月一九日 太政大臣三条 天皇に朝鮮への

使節派遣を奏上 内諾を得る

一〇月一四日 大久保ら閣議で朝鮮への使節

派遣を問題視、西郷と対立

一〇月一八日 三条 精神錯乱に陥る

一〇月二〇日 岩倉 太政大臣職に就く

一〇月三日 閣議で岩倉は朝鮮使節派遣の議

を覆す、西郷抗議し直ちに辞表提出

一〇月二四日 岩倉 天皇に奏上し朝鮮問題

を無期延期、板垣、後藤、江藤、副島の四参議も辞任

一〇月二八日 西郷横浜から乗船し十一月

十日鹿児島へ

一八七四年(明治七年)

一月一四日 岩倉 高知県土族に襲撃される

一月一八日 板垣・後藤・江藤・副島ら民選

議員の設立を建白する

二月一日 佐賀の乱(江藤新平)

三月一日 西郷 鰻温泉にて江藤新平と会う

六月 西郷 私学校、吉野開墾社創設

一八七五年(明治八年)

五月 三条実美 西郷の上京を促すが応ぜず

九月二〇日 江華島事件

十二月 西郷 売春禁止案文を書き大山県令に

建言

一八七六年(明治九年)

二月二六日 朝鮮修好条約

三月一日 島津久光の家令が上京して政府を

弾劾するよう促すが西郷辞退

一〇月二四日 神風連の乱

一〇月二八日 萩の乱

一八七七年（明治一〇年）

一月二一日 政府の密偵中原尚雄、暗殺指令を

帯び鹿児島に潜入

一月三〇日 私学校生徒 陸軍省の火薬庫を

襲撃

二月一七日 西郷 桐野・村田らを率い鹿児島

を進発

二月二二日 西郷軍熊本城を総攻撃

三月三日 田原坂の激戦

四月一五日 西郷軍 退却

八月一七日 西郷 全軍に対し「この上の進退

は各人の自由に任せる」と布告

九月一日 鹿児島、城山にこもる、九月二四日

政府軍総攻撃、城山陥落、西郷 自決

### 三、明治六年の政変と征韓論（遣韓論）の本質

こうして十年間の歩みを振り返ってみると目まぐるしい変化のなかで西郷隆盛がさらに重要な役割を果たしていることがわかる。

一八六八年九月、慶応から明治に改元、翌年大久保の提案により京都、大阪ではなく東京遷都が行われ、二官八省制度がスタートした。西郷は五月の上野戦争後、藩主とともに鹿児島に帰国、八月山形庄内藩に寛大な処置をして、十月二三日、後事を小松・大久保に託して京都を発ち十一月には鹿児島に戻っている。「自分の役割は終わった」として、悠々自適の生活にはいった。それから約二年間、西郷は新政府から距離を置いていた。つまり、明治四年に東京に行くまでの二年間、明治政府の創業期には西郷は不在であった。西郷はなぜ、明治維新の中心人物でありながら、新

政府に残らなかつたのだろうか。革命、クーデターの大將は勝利すれば新政権のリーダーになるのは世界の常である。「自分の役割は終わった」と潔く身を引いた西郷の心境は、私のような凡人には理解不可能である。私の推測では、西郷は革命に全身全霊をささげ八面六臂の活躍をしてかなり疲れていたのではなからうか。名譽欲のない西郷は少し休みたいというのが本音だったかもしれない。あるいは、大久保や長州藩が、新政府の主導権を巡って醜い権謀術数をめぐらし始めていることに嫌気がさしていたのかもしれない。

翌明治二年一月、西郷は、朝廷より召されるも固辞する。二月、薩摩藩主忠義の要請により参政一代寄合に就任、私領制度を廃止し、鹿児島旧封建藩政改革に尽力し、地租改正や、門閥、上級士族の土地を減少させ、一般士族の生活改善に尽力した。明治三年、鹿児島

島藩大参事となるが、岩倉・大久保来鹿し、新政府出仕の勅命を伝える。そして明治四年、遂に新政府の中心として動き始める。懇願されて参議として政府に戻った西郷は「廢藩置県」に尽力した。これは、大きな革命で、西郷なしでは断行できなかったと思われる。そして、岩倉・大久保・木戸・伊藤たちは欧米視察に出発する。この大事な時期に政府の中心人物が、多額な金を使って欧米に行ったことが信じられない。さらに、私はなぜ西郷と一緒に欧米視察に行かなかったのか、疑問に思う。岩倉、大久保らはなぜ、西郷だけを残したのだろうか。西郷は、すでに世界の事情に詳しくあえて今、欧米視察に行く必然性を感じていなかった可能性もある。あるいは大久保らは、留守政府を任せられるのは西郷しかないかと考えていたのかもしれない。しかし、その西郷がおとなしくしているわけがな

い。

留守政府首班は西郷を頭に、大隈・江藤・板垣らであった。この留守政府がそのまま新政府になっていけば、近代日本は大きく変わったのではなからうか。この時、誓約書が取り交わされ、留守中は、対外、国内の重要決定は行わないと書かれていた。西郷の独断専行を恐れていたのである。しかし、この一年半は、西郷が実質的最高責任者であったから、誓約書にもかかわらず、土地永代売買禁止の解除、海軍省・陸軍省、鎮台の設置、教部省の設置等を実施した。さらに、別府晋介を朝鮮に派遣し、開国の交渉にあたらせた。西郷は、明治五年参議兼陸軍元帥となり、八月二日には学制発布、一月二八日には徴兵令を發布する。明治六年には後藤象二郎、大木、江藤新平が参議となる。

五月二六日、大久保欧州より帰朝（七月に

は木戸、九月には岩倉帰朝）、彼らは、留守中の西郷のリーダーシップ、大胆な改革実績に唖然とする。

六月一二日、朝鮮問題が初めて閣議にかかった。八月三日、閣議で朝鮮使節派遣問題を討議、西郷は意見書を提出し、八月一七日閣議において、西郷を朝鮮に派遣することが決定された。

八月一九日、太政大臣三条が天皇に朝鮮への使節派遣を奏上、内諾を得る。ところがここで、一〇月一四日、大久保らが閣議で朝鮮への使節派遣を問題視、西郷と対立する。ここから伊藤・大久保・岩倉らが結束し、三条実美に圧力をかけ、西郷派遣を中止させる。

三条は精神錯乱に陥る。二度も閣議決定されたものを覆され、西郷は激怒し、参議を辞任、江藤・大隈・板垣らも辞任し、鹿児島出身の軍人もまた一斉に鹿児島に帰国した。



これが「明治六年の政変」と呼ばれ、征韓論（遣韓論）論争として有名になるものである。そしてこの政変が、やがて西南戦争へとつながるのである。この朝鮮との友好の可能性を秘めていた西郷の命がけの使節派遣を伊藤・大久保・岩倉らはなぜ反対したのか。

表向きは、「今は外交よりも内政が大事」という理由になっているが、結局、新政府は翌明治七年には、宮古島島民遭難事件を発端に初の海外出兵となる台湾出兵を行い、明治八年には李氏朝鮮に対して軍艦を派遣し江華島事件の末、日朝修好条規を締結している。

西郷の使節派遣が予定通り行われていたらその後の朝鮮関係は変わっていたかもしれない。大久保・岩倉らは、むしろ西郷の大胆不敵なリーダーシップ、主導権に恐れをなした自分たちの存在感を示すために、強引に反対したのではなからうか。いずれにしても、こ

の「明治六年の政変」こそ、近代日本の運命を左右する重大事件であった。

「征韓論」という言葉は政府側が後からつけたものであり、西郷の考えはあくまで朝鮮と友好的外交関係を結ぶことが目的であり「遣韓論」というべきものである。この辺の事情の背景については勇知之が「真説 西南戦争」（七草社二〇〇七）で詳しく論じている。

勇知之は、この「征韓論（遣韓論）」対立の背景に、長州藩の汚職問題があったことを指摘している。司法卿江藤新平が追及していたこの問題に危機感を抱いた伊藤博文が、征韓論（遣韓論）に反対することにより主導権を握り、追及を免れようとしたというものである。伊藤博文の本質を象徴する逸話である。

同様に、毛利敏彦は征韓論の通説に異議を唱え、政変の原因は征韓論ではなく、大久保・長州派と江藤新平との対立であり、政局の主

導権をめぐる権力闘争であったと論じている。したがって、これは征韓論政変ではなく「明治六年政変」と呼ぶべきであると主張している。『明治六年政変』中公新書、一九七九年。全く同感である。さらに私は、この政変は近代日本の在り方をめぐる重要な分岐点でもあったと考えている。

勇知之は、朝鮮問題、征韓論（遣韓論）の本質を、近代日本国の基本方針の違いとその主導権争いにあつたと指摘している。欧米視察団はフランスとドイツの現状を視察し、ゆるやかな近代化と市民革命のフランスより、ドイツ型の立憲君主国家、官僚主導型中央集権国家、急速な近代化路線を選んだ。その違いを下に示すようにわかりやすく表にしている。西郷は、欧米視察はしなかったが、明らかにフランス型の政治、未来ビジョンを有していたと考えられる。

<p>大久保（明治政府） 対西郷のめざした政治・ビジョン</p>	<p>ドイツ型立憲君主国家</p>
<p>官僚主導政府 急速な近代化 中央集権国家</p>	<p>フランス型民主主義国家</p>
<p>有司専制 大きな政府 軍事大国 欧米化策 資本主義の土地政策私有 文明開化の推進 政府高官と資本の癒着 帝国主義的外交 アジアの侵略</p>	<p>議会重視 ゆるやかな近代化 地方分権 地方の文化を認める 人民に威を張らず圧せず 小さな政府 兵農一致 日本の心（精神）優先 土地共同所有 文明に惑わされない 節儉、清貧な政府 道義的外交 アジア諸国の連合</p>



征韓議論図（明治10年、鈴木年基作）

前述した鈴木莊一は、「岩倉使節団は、条約改正について何ら成果もなく、ただ二年間漫然と欧米見物を楽しんだだけだった。帰国した岩倉らは、自分たちの留守中に、西郷らがイギリス・フランス・アメリカを手本とした開明的・民主的な国造りに成功を収めていることに唾然とした。」と述べている。そして「彼ら外遊組の西郷、江藤、大隈、板垣ら留守組に対する嫉妬こそ、明治六年政変を招く火種となった」と指摘している。

さらに、勇知之と同様に『イギリス・フランス・アメリカを手本に開明的・民主的な国造りを進める西郷留守政府に対して「天皇を中心とするドイツ型君主制・官僚独裁の国造り」をするしかなかった』と断じている。

そして、「ドイツ式に統帥権を独立させた憲法こそが、太平洋戦争へと突っ走る布石」となったと指摘している。

結局、西郷はじめ江藤・大隈・板垣らは、明治新政府のドイツ型立憲主義国家をめざす姿勢と思想に反対し、大久保たちの策略によって、野に下ったのである。朝鮮問題はその氷山の一角ではなかったのか。もし、日本が西郷たちのフランス型民主主義国家をめざしていれば、日本の近代化、近代史は大きく変わったに違いない。その意味で、「明治六年の政変」は大きな転換期であったと言える。

この政変の影響は、その後、一八七四（明治七年）に佐賀の乱（江藤新平）、一八七六年（明治九年）には、神風連の乱・秋月の乱・萩の乱が起り、最終的には一八七七年（明治十年）の西南戦争へと続くことになる。これらの反乱もまた反政府運動デモであったというべきである。

歴史は常に勝者、支配者によって作られる

が、明治六年の政変から西南戦争にいたるまでの四年間は、近代日本の将来を左右する重要な分岐点として教科書でもしっかりと教えるべきではなからうか。

これらの反乱は、下級武士の不平不満が根底にあったとはいえ、明治新政府のドイツ型立憲君主国家思想に反対し、フランス型民主主義国家構想を支持する反政府運動だったのではないか。特に西南戦争は、私学校生の暴走があったにせよ、西郷が「政府に尋問のかどうかあり」と述べたように、必ずしも戦争を意図していたわけではない。武装した反政府デモのようなものであった。戦争に持ち込んだのは、むしろ政府側であった。

明治維新に貢献した最大の英雄西郷隆盛が総大将であるから、政府はその意見を聞く心の広さがあれば戦争にはならなかったのではなからうか。

新政府は、長州閥の腐敗汚職の隠ぺいや主導権争いのなかで、ドイツ型立憲君主国家実現を焦るあまり、西郷を「征韓論」の戦争志向のイメージを作り上げ失脚させたのではなからうか。もともと、岩倉・大久保・伊藤は、幕末からの陰謀組であり、私心なき高潔な西郷とは比較にならない官僚政治家であった。この明治新政府の伝統は現在の政府まで続いていると言っている。

新政府は反政府運動を恐れ、そして西郷を恐れ、話し合いではなく武力によって弾圧する道を選んだ。そして、西郷は新政府軍に敗北し、潔く自刃した。この反政府運動に過剰に反応し、弾圧する姿勢は、急速な近代化とドイツ型立憲君主国家をめざす政府として、その後明治大正昭和にかけてますます強化されていくことになる。そして、その後の自由民権運動、大正デモクラシーを弾圧し、大東

亜戦争につながっていったのではなからうか。歴史にイフはないというが、イフを考えるのが歴史を学ぶ醍醐味である。もし、大久保新政府が盟友西郷の意見を謙虚に聴き、ドイツ型ではなくフランス型を導入していれば、西郷の自死もなく、西南戦争の多くの犠牲者もなく、日本の近代化は変容していたであろう。議会重視によるゆるやかな近代化となり、地方分権 地方の文化を認め、人民に威を張らず庄せず、小さな政府として兵農一致を進め、日本の伝統、心（精神）を優先し、西洋文明に惑わされない節儉、清貧な政府として、道義的外交によるアジア諸国の連合の可能性もあつたのではなからうか。そうすれば、集会条例（明治十三年）による自由民権運動の弾圧もなく、大東亜戦争にいたる天皇絶対主義や官僚と結託した軍国主義も悲惨な大敗北もなかったかもしれない。

西南戦争の敗北と西郷隆盛の死は、フランス型の民主的なもう一つの日本近代化の道の敗北でもあった。この論点は、今回取り上げた識者だけでなく、多くの心ある人々によって支持されている。

入来院重朝氏も、明治新政府の方針が大東亜戦争につながったことを指摘し、原田伊織の『明治維新という過ち』に共感している。

同じく宮下氏（天台宗大雄山南泉院住職）も明治六年の政変を、欧米列強に対峙する外交政策の路線闘争であり、文明観の対立であり、大東亜戦争敗北までの七十年間の分水嶺であったと指摘している。（『炉ばたセイ談』十三号平成二十九年）

私は、明治新政府の最大の過ちは、近代化を急ぐあまり、過去の貴重な歴史伝統文化精神を軽視または禁止したところにあると考えている。その代表的なものは、和服を軽視し、

学校教育で邦楽を排除し、神道による天皇絶対主義を構築するため、廃仏毀釈を実施したことである。さらに、その急速な近代化が、福沢諭吉が提唱した「和魂洋才」ではなく、「洋魂洋才」になってしまったことである。「和魂」は、天皇絶対主義に収れんされ、世界に類例のない悲惨な大東亜戦争へとつながった。

そして、敗戦後は米国の支配、影響により、ついに日本人は一五〇年かけて完全に「洋魂洋才」になってしまったのではないか。

戦後日本は米国流の文化や民主主義を押し付けられ、日本の伝統的精神文化を忘れてしまった。米国の長所である自由と民主主義も、形式的に受け入れたが、国民に根付いたとは言えない。国民の力で勝ち取ったものではないから真の民主主義国家とはなっていない。私はこれまで、広島、福山、福岡、鹿児島

島で地域活性化のために行政と連携しながら様々な活動を経験してきたが、国民、市民が主人公であるところから実感したことはない。きわめて形式的民主主義なのだ。日本、および日本人が真の民主主義の精神を体得するにはまだまだ時間がかかるというのが実感である。

その意味で、市民革命である明治維新、そして第二の革命を目指した「明治六年の政変と西南戦争」及び明治から大正、昭和初期までの自由民権運動や大正デモクラシーの歴史を学び、検証することが大事ではなからうか。

#### 四、西南戦争と自由民権運動

そこで最後に、自由民権運動と西南戦争の関連について触れておきたい。

「明治六年の政変」後、西南戦争に至る過程は次のようなものである。

明治六年十一月、内務省が設立され、内務



官軍と西郷軍の激突を描いた浮世絵

卿に大久保が就任、政府の主導権を握ることになる。これにより内務省主導の官僚制が確立し、太平洋戦争の敗北まで続くことになる。明治七年、一月板垣・後藤・江藤・副島ら民選議員の設立を建白、二月佐賀の乱（江藤）が起きる。四月台湾出兵、明治八年元老院、大審院設置。明治八年三条実美が、西郷の上京を促すが固辞。明治九年一〇月、神風連の乱、秋月の乱、萩の乱（前原一誠）が起きる。これらの反乱もまた下級武士の新政府に対する抗議行動であった。

明治十年一月二一日政府の密偵中原尚雄が、暗殺指令を帯び鹿児島に潜入、一月三〇日私学校生徒陸軍省の火薬庫を襲撃、二月大山県令を私学校に招き、東上すると告げる。西郷、桐野・村田らを率い鹿児島を進発、熊本城を包囲、総攻撃。田原坂の激戦に敗北、八月城山に逃れる。九月政府軍の総攻撃によ

り陥落、西郷自決し、西南の役が終了することになる。西南戦争の敗北は、西郷の考えるより民主的な新しい近代日本の在り方の敗北でもあった。

私は、各地の反乱も西南戦争も明治新政府の方針、急速な近代化路線や有司専制に対する抗議行動であり、第二の明治維新をめざしたクーデターではなかったかと考えている。そして、その中心人物が西郷隆盛であり、天皇を中心とする近代統一国家とともに下級武士や庶民の立場に立った真の民主的革命家として新政府に抗議しようとしたのが、西南戦争であったと考えている。

「政府に尋問の筋これあり」という言葉がこの戦争の真意を象徴している。西郷は戦争も辞せずという覚悟はあったが、あくまでも政府と話し合うつもりであった。その証拠が、海路ではなく陸路での進軍であったことであ



る。つまり、これは武装した下級武士たちによる反政府デモ行進であった。しかし、大久保を中心とする新政府は全く聞く耳をもたず、西郷の実力や反乱を恐れ、実力行使に出たのである。つまり戦争にしたのは政府側であった。西郷は、私学校生に命を預け、海路ではなく陸路から進軍し地方の共感を得ようとしたのではないか。しかし、その思惑は外れ、熊本城で敗北し、田原坂の激戦の後、城山にこもり、ついに自刃した。

この十年間の西郷の行動とその後の近代日本の歩みに関する研究は、いまだ、十分に解明されていないように思える。

特に、その後の大正デモクラシーへと続く自由民権運動と西南戦争との関連については極めて不十分である。

西南戦争と自由民権運動の関係についてはこれまで論じられることが少なかったが、

小川原正道は「西南戦争と自由民権」（慶応義塾大学出版会、二〇一七）で、西南戦争と自由民権運動の関係について詳細に分析している。特に、鹿児島における自由民権運動研究の不十分さを指摘しながら、鹿児島の動きについて詳しく論じている。

小川原は、西南戦争前後の民権家として、鹿児島の田中直哉と柏田盛文を取り上げている。田中は、西南戦争前は評論新聞記者として政府を攻撃し、開戦直前に鹿児島に帰郷、私学校徒の鎮撫・啓蒙に努め、真宗の解禁を通して権利・義務の観念を理解させようとしたが、結局西郷暗殺計画の容疑者として逮捕され、戦後は鹿児島県会議員、九州改進黨鹿児島県部の幹部となった人物である。

柏田は、慶応義塾卒業後すぐに田中とともに帰郷し、やはり私学校生を鎮撫し、逮捕され、のちに鹿児島県会議長や自由党幹事、衆

議院議員などを務めた人物である。柏田盛文については、奇しくも前号で触れた入来院貞子が詳しく論じているが、もつと注目されるべきであろう。『千台』三二号平成十六年）

そして、小川原は、西南戦争は自由民権家にとつて、光と影の二つの側面を持っていたと指摘している。

民権家は、西南戦争に、明治新政府を現実  
に打倒しうる可能性と、理想実現の機会を夢  
見た。光の部分である。一方、私学校党は民  
権論を理解しない守旧派に属する人々であつ  
た。影の部分である。光の部分に運命を託し  
た存在が熊本協同体、中津隊といった薩軍に  
参戦した民権党であつたと指摘している。私  
は、この西南戦争の光の部分をもつと研究し  
明らかにすべきだと思う。そして、その後の  
自由民権運動や大正デモクラシーにどう引き  
継がれ、どのように弾圧され、戦争体制へと

突入したかを、現代の教訓として学ぶことが  
大切ではないかと思う

## 五、終わりに

これまで「明治六年の政変と西南戦争」に  
ついて、近代日本の分岐点という視点から述  
べてきたが、この事實は、もつと注目される  
べきであり、教科書でも大きく取り上げるべ  
きではなからうか。明治維新一五〇周年を迎  
え、その真実の歴史を、国民の立場から考え  
明らかにする作業はいまだ不十分と言わねば  
ならない。

現在、日本は激変する世界の中で路頭に迷  
っている気がする。政府は相変わらず権力に  
しがみつき、官僚支配は問題を内包しながら  
不死鳥のように生き残っている。歴史の潮流  
は、底の方で脈々と現在まで流れているのだ。

自由民権運動は、現代・未来につながる重  
要な理念・思想であり、現在においても自由

と民主主義の思想が国民に根付いているとは言い難い。戦後、米国によって与えられた民主主義は極めて形式的であり、国民に血肉化されているとは言いがたい。戦後政府もまた安保闘争はじめ多くの民衆、学生の反政府デモを武力で弾圧してきた。

現代を生きる私たちは、この歴史を教訓として二度と同じ過ちを繰り返さないよう、現在の政治家、官僚の在り方をしっかりと監視しなければならない。

「永続敗戦論」で有名になった白井聡は近著「国体論 菊と星条旗」（二〇一七集英社）で、「国体」というキー概念を駆使し、近現代史を見事に分析している。近代日本の前半に作り出され、封建社会だった日本を少なくとも外見的には列強に伍する近代国家へと成長させた装置が「国体」であったと分析し、それは進路を誤り、一九四五年に一度破滅し、

現在、華々しい経済成長のあと二度目の破滅に向かってしていると指摘している。

過去の歴史を学ぶことは、現在をより深く理解し、未来を創造するために必要不可欠な課題である。次回は「国体論」を巡って、私なりの近現代史論を、七〇年の戦後体験を踏まえながら書いてみたい。

（癒しと学びと語らいの里・ハーブガーデン花びあ（民宿・カフェ）代表、個人と地域のキャリア開発を支援する国際キャリア研究所（所長）

### 【参考文献】

・「明治維新の正体」鈴木莊一（毎日ワングズ 二〇一七）

・「政府に尋問の筋これあり・西郷隆盛の誤算」鈴木莊一（毎日ワングズ

二〇一八）

- ・「真説 西南戦争」勇 知之（七草社 二〇〇七年）
- ・「幕末戊辰西南戦争」学習研究社 二〇〇六
- ・「西郷隆盛―孤高の英雄全軌跡」新人物 往来社二〇〇八
- ・「明治六年政変」毛利敏彦 中公新書 一九七九
- ・「私の西郷研究」安田耕作ほか 盈進社 二〇一二
- ・「西郷隆盛 維新一五〇年目の真実」 家近良樹 NHK出版 二〇一七
- ・「西郷南洲翁略年表」阿多俊彦編 二〇一八
- ・「西郷隆盛―西南戦争への道」猪飼隆明 岩波書店 一九九二
- ・「西南戦争と自由民権」小川原正道 慶応義塾大学出版会 二〇一七
- ・「明治維新という過ち」原田伊織 毎日ワンス 二〇一五
- ・「大西郷という虚像」原田伊織 悟空出版 二〇一六
- ・「虚像の西郷隆盛 虚構の明治一五〇年」 原田伊織二〇一八講談社
- ・「永続敗戦論」白井 聡
- ・「国体論 菊と星条旗」白井 聡 集英社親書 二〇一八
- ・「まぼろしの維新 西郷隆盛、最期の十年」津本陽 集英社 二〇一八
- ・「西郷隆盛の冤罪 明治維新の大誤解」 古川愛哲 講談社二〇一七
- ・「素顔の西郷隆盛」磯田道史 二〇一八 新潮社